

地域福祉と災害ソーシャルワーク 2単位

担当教員：山本 克彦

大規模自然災害がもたらす被災地域の環境の変化と、現場におけるソーシャルワークを実践知から学ぶ

講義目的・到達目標

災害時におけるソーシャルワークを学ぶ

災害という特殊な状況でソーシャルワークに求められるものとは何かについて、東日本大震災等における実践事例をもとに、時系列や状況ごとに検証する。特に災害ボランティアセンターの設置、運営や現場でのボランティアコーディネートのあり方、ボランティアによるソーシャルワーク機能等について考える。またDIG (Disaster Imagination Game:災害図上訓練)やHUG(避難所運営ゲーム)をツールとしたワークショップの体験も予定している。

災害時の学びから平常時へ、地域福祉の課題をつなぎ、つむぐ

災害時は、平常時から取り組む福祉課題だけでなく、ふだんは潜在している課題が多様な形で顕在化する。ここでは、防災だけでなく、災害時要援護者を把握し、自助・共助を原則として被害を最小限にするためのふだんの取り組み(減災)について、地域福祉の視点から考える。また、今後起こり得る大規模自然災害への備えとして、本スクーリングを受講した個々が参画できるしくみについて、ワークショップを通して描き出す。

講義の構成

講義の流れ

1.東日本大震災の体験から(講義)

この震災において岩手県での災害ボランティアセンター設置・運営支援に関わった経験から、被災した地域の当時の状況について学ぶ。

2.災害ソーシャルワークの理論と方法(講義)

災害とは何か、その時に地域に起こる問題や災害時要援護者に関する課題など、平常時の地域福祉との関連を考えながら学ぶ。

3.災害時を描くワークショップ(ゲスト講義)

地域の災害時をイメージする災害図上訓練や、避難所運営等をテーマに、参加と体験の場としてワークショップを実施する。

4.大規模自然災害におけるボランティアの組織化と運営(講義)

今後起こり得る大規模自然災害を想定し、参画するボランティアのしくみづくりや、専門職チームとの連携など、東日本大震災の実践から学ぶ。

5.ここから始まるソーシャル・イノベーション(ゲスト講義)

日本福祉大学通信教育部の学生として、ボランティアへの参画を描き、社会変革につながるあらたなしくみづくりのワークショップを実施する。

6.全体のふりかえり

1 東日本大震災の体験から(講義)

2 災害ソーシャルワークの理論と方法(講義)

3 災害時を描くワークショップ(ゲスト講義)

4 大規模自然災害におけるボランティアの組織化と運営(講義)

5 ここから始まるソーシャル・イノベーション(ゲスト講義)

6 全体のふりかえり

講義のポイント

想定外の大規模災害のような不測の事態に私たちは何ができるか、何をすべきか。人々の命を守る災害看護という分野があるのと同様に、その“命につながる人々の生活を守る”災害ソーシャルワークが注目されている。これはかつてない新しい専門分野のようで、実はふだんからの地域福祉と密接な関係を持っている。ここでは災害時と平常時をつなぎ、災害時に起こり得る現実を知ることから、ふだんの地域のあり方や問題、その解決に向けて取り組むべき課題を考える。

受講するにあたって

①事前学習のすすめ

大規模自然災害に限らず、台風等による豪雨水害や竜巻、大雪など、災害に関するニュースや番組、新聞記事等を意識し、視聴するように心がける。参考文献を読んでおくことが望ましい。

②参考図書

上野谷加代子監修／社団法人日本社会福祉士養成校協会編集『災害ソーシャルワーク入門―被災地の実践知から学ぶ』中央法規、2013
桜井政成編著『東日本大震災とNPO・ボランティア―市民の力はいかにして立ち現れたか』ミネルヴァ書房、2013年

③評価基準

授業への出席とともに、ワークショップへの積極的な参加も評価の対象とする。
また2日間の最終の時間に、内容と受講後の個別の課題やアクションプランに関するレポートを作成する。

④より学びを深めるために

自分自身の身近な地域や暮らしについて、受講後も災害時と平常時のつながりを意識して過ごす。
そのことがふだんのくらしのしあわせにもつながるヒントとなる。